

『座敷牢の暴君』

著：神香うらら

ill：こうじま奈月

さすがに昨日の今日で公園を通る気にはなれなくて、由多佳は住宅街を歩いて帰宅した。

外壁に取りつけられている郵便受けを覗(のぞ)いてから外階段を上がる。

「……！」

階段を上りきったところで、由多佳はぎくりとした。

外廊下の一番奥、由多佳の部屋のドアの前に誰かが座っている。蛍光灯の明かりが届かないので顔が見えず、由多佳はその場に固まった。

「遅えぞ」

人影がゆっくりと立ち上がり、薄暗い蛍光灯にその顔が照らし出される。

部屋の前にいたのは、昨日の高校生、地塩だった。

「な……なんで……」

「これ返しに来た」

地塩が紙袋を掲げる。真子人のジャージを返しに来たのだろう。

(え……わざわざ返しに来るとは思わなかった……)

昨日の強引で偉そうな態度の印象が強烈だったので意外だった。歩み寄って受け取り、中を見るとジャージはきちんと洗濯して畳んであった。

(お母さんに洗ってもらったのかな)

地塩に対する印象が少しよくなり、由多佳はふっと口元を緩(ゆる)めた。

「わざわざありがとう。ドアノブにかけといてくれたらよかったのに」

「寒い。早く開けろ」

地塩が学生服のズボンのポケットに手を突っ込み、苛立ったようにドアを顎(あご)で指す。

「ええっ!？」

驚いて、由多佳は地塩の顔を見上げた。まさか部屋に上げろというのか。

「いやあの、困るよ」

「何が」

「何がって……ここは僕一人で住んでるわけじゃないから」

困り果てて、由多佳の眉がハの字に下がっていく。

十月初旬の夜は結構肌寒い。自分の帰りを待って長い間外にいたらしい彼に、普通だったら熱いお茶でも出そうという気になるだろう。しかし昨日の真子人の忠告が耳に甦(よみがえ)り、彼を部屋に上げることに躊(ちゅう)躇(ちよ)する。

由多佳が鍵を開けようとしなないのを見て、地塩が学生服のポケットからぴらっと何かを取り出した。

「中村由多佳ってのがあんたの名前？ それともこっちの中村真子人のほう？」

「ええっ？ あ、それ……っ！」

地塩が由多佳の前にかざしたのは、ダイレクトメールの葉書と封筒だった。

「ちょっと！ 人んちの郵便物を……っ！」

慌てて彼の手から葉書と封筒を奪い取る。

「だって名前教えてくれねーんだもん。で、どっちだよ」

「君ねえ、勝手にポストを開けるのは違法行為だよ」

さすがに由多佳も腹が立ち、地塩を睨みつけた。

「なんかあんた、教師みたいだな」

地塩が肩を揺すって笑う。むっとして、由多佳は眉を寄せた。教師志望の由多佳だが、こんなふうにからかわれるのは不愉快だ。

「ジャージ返しに来てくれてありがとう。もう会うこともないね。さようなら」

素っ気なく言い、帰れというようにびしっと外階段を指さす。

「……………」

由多佳の言葉に、地塩がふいに真顔になった。無言で一步前に踏み出し、由多佳に詰め寄る。

「……っ!？」

思わず由多佳は後ずさり、背中を自分の部屋のドアにぶつけてしまった。

目の前が黒い学生服の胸で遮られる。大きな手が伸びてきて、由多佳の顔の両脇にどんと手をつく。

(ひ……っ)

びくっと首を竦め、由多佳は反射的に目を閉じた。

「名前教えろ」

おそろおそろ目を開けると、驚くほど間近に地塩の顔があった。黒い瞳が、じっと由多佳の目を覗き込んでいる。

「お、教える必要ないでしょう！」

半ば意地になって由多佳が突っぱねると、地塩が可笑しそうに笑った。

「俺に名前聞かれて答えない奴は初めてだなあ」

「……っ」

そのセリフに脅(おど)しじみた匂いを感じ取り、由多佳はごくりと唾を飲み込んだ。

「あんた、変わってんな。弱いくせに喧嘩止めに入ったり、この俺に説教かましたり」

地塩がじっと由多佳の目を見つめる。

その瞳に囚(とら)われたように、体が動かない。蛇(へび)に睨まれた蛙(かえる)……という言葉が頭をよぎる。

硬直する由多佳を面白そうに観察し、地塩がゆっくりと口角(こうかく)を上げて凄(すご)みのある笑顔を浮かべた。

「————気に入った。俺のものにする」

「……………え!？」

何を言われているのかわからなくて、由多佳は目を白黒させた。

それは、舎(しゃ)弟(てい)にしてやるとかそういう意味だろうか……。

「……いやあの、僕は……、痛っ」

丁重にお断りしようと口を開くと、両手首をがっちり掴まれてドアに押さえつけられてしまった。

「んんんっ！」

抗議する間もなく、乱暴に唇を塞(ふさ)がれる。

目を白黒させて、由多佳は自分に口づけている男の顔を凝(ぎょう)視(し)した。黒く澄(す)んだ瞳が、焦点が合わないほど間近で光っている。

それはまるで猛獣の目のようで、こんな場合だというのに由多佳はその猛(たけ)々(だけ)しさと美しさに見入ってしまい……。

(うわあああ！)

熱い舌が口(こう)腔(こう)内に押し入ってきて我に返り、由多佳はじたばたと暴れた。

しかし暴れれば暴れるほど、きつく押さえつけられてしまう。

(俺のものにするってそういう意味かあああっ!!)

ようやく地塩の言葉の意味を理解し、由多佳は愕然(がくぜん)とした。

まさかこの男にファーストキスを奪われるとは思ってもみなかった。しかもキスという甘い響きとはほど遠く、乱暴で強引で一方的で……。

「んううっ」

逃げ惑う由多佳の舌を、地塩が貪(むさぼ)るように追い詰める。

自分が何か大きな肉食動物に食べられそうになっているところを連想し、背筋がぞわりと粟(あわ)立(だ)つ。

(く、苦しい……)

次第に意識が朦朧(もうろう)とし、体の力がかくんと抜ける。

若い猛獣は、抵抗の弱まった獲物の柔らかな唇を思う存分貪り尽くした。由多佳の口腔内を隈(くま)なく舐(な)め回し、舌を吸う。

「ぶは……っ」

ようやく口腔内の蹂(じゅう)躡(りん)から解放され、由多佳は大きく喘(あえ)いで息を吸った。文句を言おうと口を開きかけるが、今度はパーカーの裾(すそ)をまくり上げられて目を剥く。

「うわあああっ！」

白い肌が外気に晒(さら)され、由多佳は叫んだ。

ドアに押さえつけられて、パーカーを胸までたくし上げられる。

「ちよっ！ ここをどこだと思ってるんだ！ 外でこんな……っ！」

これ以上好き勝手にさせるわけにはいかない。身を振(よじ)り、胸をまさぐろうとする地塩の手を振り払う。

由多佳の反撃に、地塩もむきになって応戦してきた。由多佳の細い肩を掴み、もう一度口づけようと覆い被さってくる。

必死で顔を背(そむ)けて、由多佳は菌を食いしばった。

「ひゃあああっ！」

大きな手に胸をまさぐられ、その冷たさにぞくりとする。

冷えた手で急に触られたからだと思ったが、それだけではない何か未知の……体の芯(しん)が痺(しび)れるような感覚に首をびくっと竦める。

抵抗したいのに、全身からすうっと力が抜けていく。

このままではまずい。獣(けもの)に貪り尽くされてしまう——。

本文 p37～44 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>